平成30年度大韓民国国立公園管理公団北漢山生態探訪院との交流事業を終えて

滝　川　隆　一（国立登山研修所専門職）

2018年９月に実施した大韓民国国立公園管理公団北漢山生態探訪院との交流事業について報告する。

この交流事業は、2010年に締結した独立行政法人日本スポーツ振興センター国立登山研修所と大韓民国国立公園管理公団北漢山生態探訪院（旧山岳安全教育センター）との協約書に基づき、登山事故防止と安全登山の普及のための情報提供等を行うとともに交流活動を通して相互理解を深め、健全な登山の発展に寄与することを目的として開催した。

訪問と招聘を交互に行い、今回が５回目の招聘となる（韓国交流団は、平成27年にこの交流事業とは別の事業で来所している）。交流事業としては８回目の開催であった。

通訳は、前回の招聘時に続き宋勇（ソンヨン）氏（高志山の会）に依頼した。

１　期　間

平成30年９月３日(月)～８日(土)

２　場　所

国立登山研修所及び夏山前進基地、剱岳

３　招聘者

朴容煥（パクヨンファン）氏
　国立公園登山学校　校長　※団長
李昇錄（イスンロク）氏
　災難安全処　主任
金民澈（キムミンチョル）氏
　国立公園登山学校　現場支援職
李東潤（イドンユン）氏
　北漢山（ブカンサン）事務所　現場支援職
林漢淙（イムハンジョン）
　智異山（チリサン）南部事務所　現場支援職
申永煥（シンヨンファン）
　無等山（ムドゥンサン）事務所　現場支援職

４　日程及び内容

９月３日(月)【視察】
　富山空港→富山県警察航空隊及び山岳警備隊（視察）→登山研修所
９月４日(火)【情報交換会】
　称名滝見学→富山県[立山博物館]見学→安全登山に関する情報交換会
９月５日(水)【合同登山】
　登山研修所→室堂→室堂派出所視察→雄山→真砂岳→別山→夏山前進基地
９月６日(木)【合同登山】
　夏山前進基地→剱岳（別山尾根ルート）→夏山前進基地
９月７日(金)【歓迎レセプション】
　夏山前進基地→雷鳥沢→室堂→登山研修所→歓迎レセプション
９月８日(土)【視察】
　県内登山用具店等視察→富山空港

５　概　要

【第１日目〈９月３日(月)〉】

午後３時半頃、富山空港の到着ゲート前にて、通訳の宋氏、富山県警察山岳警備隊柳澤隊長、同じく小髙分隊長、宮﨑所長、宮田、滝川両専門職の計６名で、韓国交流団の到着を待った。交流団を乗せたエアアジアの航空機は午後４時頃に着陸したが、

交流団はなかなかゲートから姿を見せず、「もしかして…」という不安が頭をよぎった。着陸からおよそ40分経った頃、大きなザックとキャリーバッグを引いたたくましい男たちがゲートから姿を現し、我々もようやく胸を撫で下ろすことができた。



富山空港に到着した韓国交流団

軽く挨拶を交わした後、一行は隣接する富山県警察航空隊及び山岳警備隊の事務所へ向かった。そこでは、富山県警察保有のヘリコプター「つるぎ」の性能や役割等を中心に、航空隊、山岳警備隊の任務などについて説明を受けるなどした。警察の決まりで格納庫内の写真撮影は禁止されたが、交流団は通訳の宋氏を通じて隊員の話に耳を傾けた。交流団からは、飛行時の高度や飛行時間、出動のタイミングなどの質問が相次ぎ、ヘリを使った遭難救助活動に興味深い様子であった。

【第２日目〈９月４日(火)〉】

この日は朝から称名滝、富山県[立山博物館]の見学を行った。台風の接近が分かっていたが、まだこの時点では天気はもっていた。称名滝の展望台では、勢いのある瀑布をバックに記念写真を撮ったり、職員や宋氏にいろいろと質問をしたりと、交流団は思い思いに時間を過ごした。



称名滝をバックに

称名滝の後は富山県[立山博物館]へ向かった。学芸員の案内のもと、約１時間半をかけて館内、曼荼羅遊園などを見学、散策し、立山一帯に対する理解を深めた。

午後からは、当研修所と交流団に富山県生活環境文化部自然保護課、富山県警察地域部山岳安全課を加えた四者による「安全登山に関する情報交換会」を開催した。このような情報交換会は、交流事業としても当研修所の事業としても初めての取組であった。情報交換会では、「安全登山」をキーワードにそれぞれが行う取組について発表をし、質疑応答なども行った。

当研修所からは宮田専門職が研修事業の紹介、情報発信、他団体との協力などについて、交流団からは、イ・スンロク氏が韓国国立登山学校での取組について発表を行った。韓国の登山学校では、小中高生を対象にした研修プログラムも行っているとのことで、このあたりは当研修所の事業とはっきりと違うものであった。交流団からは当研修所における研修体制等について質問があった。

その後、県自然保護課武部課長からは、立山黒部アルペンルートの海外観光客入込数などの報告や室堂周辺、剱岳における登山道整備状況などをグラフや写真などを示した分かりやすい説明があった。増加するインバウンドの対策として、道標にピクトグラムの活用を考えていることなどにも触れた。交流団からは、有料トイレの使い方や韓国の登山道との違い、台風時の入山制限の有無や責任の所在などに関する質問があった。

県警山岳安全課からは、山岳警備隊の小髙分隊長

が実際の救助映像などを流しながら、救助現場の実際について説明し、韓国人の山岳遭難事例についても紹介した。交流団からは、日本全国の山岳警備隊（救助隊）設置数や民間救助隊との協力体制などについて質問があった。

情報交換会は約２時間半に及んだ。四者が顔を合わせるのは初めてということもあり、発表や質疑応答では緊張感が漂っていたものの、後半のフリーセッションでは、お互いの意見交換が活発に行われるなど、次第に和やかな雰囲気となった。



安全登山に関する情報交換会

今回初の取組として行った情報交換会であるが、初回ということもあり手探りでの開催であった。当研修所、交流団はお互いに行き来しており、それぞれの国での登山実施状況や安全登山に関する取組をある程度把握していたが、交流団にとって、また県自然保護課や県警山岳安全課にとっては初めて見聞きする内容もあったと思われ、韓国の登山事情など事前の基本的情報の共有がより必要であったという点は反省すべき事項である。しかし、意見交換を行ったことが、それぞれの活動の概要を把握するためのきっかけとなったのではないかと思う。

今後、テーマを絞るなどして更に踏み込んだ情報交換をしていくことができれば、お互いの安全登山に資する活動にとって有用なことだと思われる。

情報交換会終了後は、翌朝に控えた入山を前に行動食などの買い出しに向かった。台風が最接近し、暴風雨となる中を片道約30分の所にあるスーパーへ出掛けた。足早に済ませたいところではあったが、それぞれ行動食や基地での食材などをじっくりと物色した。帰所後には、宮田専門職指導のもと、室堂周辺の地形図を見ながら行動計画、個人の持ち物や共同装備などについて念入りな確認を行った。



入山前の事前学習会

【第３～５日目〈９月５日(水)～７日(金)〉】

交流３日目早朝、合同登山の同行をする新井健二講師が合流した。いよいよ合同登山である。日程は、１日目に雄山、真砂岳、別山と縦走して剱沢へ入り、２日目に別山尾根ルートで剱岳山頂を目指す計画であった。剱岳登山をすることを事前に韓国側へ伝えていたこともあり、今回の交流団は十分に登山経験を積んでいる者ばかりが人選されたようで、剱岳の往復も大変スムーズであった。合同登山の様子については、新井講師が執筆した記事を読んでいただくことにし、ここでは割愛させていただく。



入山日朝の出発式

合同登山３日目（交流５日目)、この日は朝から雨が降り、前日とは打って変わって悪天となった。雨と霧の中を足早に下山し、全員が研修所へ無事に帰着した。夜には富山駅前で環境省、県自然保護課、県警山岳安全課、当研修所専門調査委員や講師、地元山岳団体などの関係者にも出席をしていただき、総勢40名で「歓迎レセプション」を開催した。お互いに手土産を交換したり、話に花を咲かせたりしながら、賑やかしく相互交流を行った。

【最終日〈９月８日(土)〉】

交流最終日は県内の登山用具店等を回った。三井アウトレットパーク小矢部では、ほとんどの時間をモンベルでのショッピングに費やし、韓国で待つ仲間達への土産、また自分のものなど、交流団は大量に買い込んだ様子であった。富山空港までの途上、富山市内のランプジャック掛尾店、アピタ富山店にも立ち寄り、フライトまでの時間を無駄なく過ごした。

富山空港へ向かうためにアピタを出たとき、ちょうどパク校長のもとに韓国の知人から電話があり、我々職員も交流団もフライトの時間を勘違いしていたことが分かった。大慌てで空港に向かい、どうにかチェックインができたものの、次に乗り込んだ航空機が始動しないというトラブルが発生した。展望デッキで延々と離陸を見守り、万が一の滞在延長という可能性も頭をよぎったのだが、約１時間後にようやく離陸し、交流団は無事に帰国の途へ着いた。



登山用具店での買い物

６　交流を終えて

これまでの交流事業の継続実施により、両国の登山事情や登山技術、知識などがかなり共有されてきた。今回もそれぞれの安全登山の普及、発展に大きな成果を上げてきていることを感じた交流であった。近年は、室堂においても韓国からの登山者、登山グループを多く見掛けるが、少なくともこれらの登山者が、安全登山に関する事項を自国で十分に学んでから日本へ登山に来ているということになれば、この交流の意義はより大きいものになるし、インバウンドが増加している昨今この交流事業の成果がより一層期待されるものと思われる。

また、韓国には、北漢山に代表されるように登山口がソウル近郊にあったり、登山用具店が何十軒も軒を連ねていたりするなど、市民が手軽に登山を行うことができる環境が整っている。そのような環境で行われている韓国の安全登山の普及・啓発の方法から我々は、日本の一般登山者への安全登山の普及に向けて、多くのことを学び取ることができると思う。

今後は互いの課題をより明確化し、そこに焦点を当てて交流を行っていくことがこの交流事業の次なるステップであると思われる。



合同登山の下山中、一服剱にて